

ぼくが、父を看取った話。
末期がんの在宅介護・緩和ケア

桜咲夜

まえがき

僕は当時24歳、ひとりぐらし。

5年前、19歳の時にマンションを借り、親元から独立しました。

PCを使い、自宅で働く自営業です。

父はS38生 50歳でした。

小さな会社を経営していました。

僕と姉が実家から出たあとは、再婚した母と、2人とても仲良く暮らしていました。

親の死や、介護なんて、遠い将来のことだと思っていたのに
あっというまにやってきて、あっという間に去って行きました。

忙しい毎日だけど、父との思い出を ひとつ残らず忘れたくないため
日記に綴っていました。

余命告知、介護、死亡、その後。想像しない出来事ばかりで
次にどうしたらよいのかが、まったくわかりませんでした。

今まで闘病ブログを読んだことはありますが、まったくの興味本位で、好奇心でしかなく、
まさか自分が体験するとは思っても見ませんでした。

父は亡くなってしまったので、救いにはならないとは思いますが
ほんの少しでも、心構えや参考になれば良いと思い、公開しました。

桜咲夜

僕にとっては、ここからが始まりだった。

夜、父より電話を受ける。

「腹水病ってというのがどういう病気か調べてくれ」

「腹水？腹水がたまってるの？」

「腹水病でご飯が食べられないんだよ」

「すぐ病院に行きなよ」

「腹水病がすぐしぬ病気かどうか調べてよ。お腹が張っちゃって、もうずっとご飯が食べられていないんだよ」

「腹水だけでは死なないと思うよ。なんか原因があって腹水がたまってるんでしょう」

「じゃあそれを調べておいてくれ」

「わかったけど、とにかく病院にいきなよ」

「そうだな」

とにかく腹水を検索してみる。

出てくるのは「肝硬変」「末期がん」「余命」などひどく悪い内容ばかり。

でも、膝に水が貯まる人とかもいるし

今までどこも悪いところがなかったのも不思議だったし、

珍しくどっか故障したんでしょう、位にしか考えていなかった。

ご飯が食べられてないって、人の家に弁当ばかり持ってきて僕の心配ばかりしていたじゃないか。

父は12月で51歳 クリスマスに近い日。

たまにはちゃんと病院いけばいいんだよ・・・としか思っていなかった。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

26日午後、姉より電話で父の入院を知る。

この日は仕事が忙しく、すぐに行けなかったので明日行くと伝える。
買ってきてほしいものを聞いたが、特にないそう。

姉によると、父は歩くこともちゃんと出来ず、お腹は腹水でパンパン、妊婦のようだったという。
そして入院してすぐにお腹に針を指し腹水を抜いたそう。

やっぱり腹水が溜まってるから「腹水病」を調べてくれなんて、聞いてきたのか。

そして次の27日、僕も面会時間に病院へ。
午後、病院に着くと、母と姉が来ていた。

緊急入院で個室しか用意ができなかったらしい。
とても綺麗で広い部屋。30㎡くらいあるだろうか。

電動ベッド・洗面・風呂・トイレ・洋服ダンス・テレビ・収納棚・専用電話・丸テーブル&ソファセット
そして綺麗な景色の大きな窓。なんとも贅沢な部屋に、父は寝ていた。

そのベッドに横向きに体を丸めて寝ている、顔色の悪い父。
僕が来たのを見ても、ろくにしゃべりもせず、目だけこちらに向けて
「来たね」という表情をしていた。

父は、針を指して水を抜いたせいで お腹がとても痛いそう。

姉が「さーくん、外にコーヒーでも飲みに行こうか！」と言ったのでバイクの後ろに姉を乗せ、スタバに行った。

そこで詳しい話を初めて聞いた。

姉によると、

食べられない、腹水がたまっている父が近所の医院に行ったのが23日。医院では、すぐに紹介状を書くからこの総合病院に行くように言われた。26日にこの病院に予約を取り、診察したら、このまま入院だと言われたらしい。

それを聞いて母はおろおろしてしまい、姉が代わりにすべての手続をしたそう。

腹水は見た目は、特に変わった液ではなさそうだがCTで胃に「なにか」があるのを発見したそう。今週中くらいに胃カメラを飲んで、組織検査をするとのこと。

なにかとはがんの可能性があるんだろう、と姉が言った。

「医者がそう言ったの？」

「うん、予想はついているけど、病名は検査してから。そこに悪いものがあるって。」

姉があまりにもさらさらと言うので、一瞬、どういう意味か、考えた。僕はスタバのテラスで、サンドイッチを握りしめながら涙をポロポロとこぼしてしまった。

父は、2-3週間前にぼくの家遊びに来て、僕の左にあぐらをかいて座り、PCを見ながらお茶も出さない僕を見つめ、にこにこ話しかけてきた。

「仕事はどうだ？」「収入は安定したか？」「ちゃんと飯食べてるか？」僕の心配ばかりする父に、大丈夫だよ、平気だよ、と何回も言いながら本当に心配症だな～、もう僕は大人なのに・・・などと思いながら見送った。

あれが僕の部屋に来る、最後になるかもしれないのか。

晴れてたのでバイクで病院に行く。

院内のコンビニでコーヒーとサラダスパを買い、病室で食べる。

父が「俺が食べられないのに、美味しそうに食べるなあ！」と笑いながら眺めているのでわざと「美味しいよー！」と見せてみた。

「少し食べる？」と聞くと、ちょっと悲しそうに首を振った。

この日の医師の説明では、

腹水は綺麗で、水自体は、悪い水なわけではないこと。

胃にCTで発見された「悪いなにか」が原因であること。

ある程度の想像は付いているけど、はっきりしたことは

胃カメラの組織検査の結果がでてから説明するとのこと。

体力を落とさないため、毎日歩いてほしいということ。

なのでさっそく、同じフロアのサンルームのようなところへ3人でお散歩に行った。

点滴に掴まってゆっくりとしか歩けなくなっている。

父は、フルーツジュースを飲んで外を眺めながら、

自分の親の話、親戚の話、お墓の話、財産の話などを始めた。

なんだよ、まるでしぬって決まってるみたいじゃないか。

まだわからないのに・・・。

「俺は19って数字に気をつけなきゃいけないんだ。19の日になんかあるんだよ。

これで19回目の死にかけだから今回こそ危ないよ」

しきりに言っていた。

いつも自慢のように話し、僕らは「そーなんだすごいね^^」と答える、いつもの話だ。

父は、僕がバイクに乗るのをとても心配している。

危ないから、暗くなる前に帰れ！としつこいので追い立てられるように帰った。

姉を乗せて帰ったが、姉は長時間、バイクに乗るのは久しぶりらしく
「足が痛い！お腹に力が入って疲れる！」と、後ろから文句ばかり言っていた（笑

買物をするというので、途中の大型スーパーでバイクを止め、
一緒に食品街へ。

僕は食欲が無いので、フルーツの乗った杏仁ぷりんだけ買い物カゴへ入れて姉の後ろをついて
いく。

姉は自分用にお弁当と、飲み物など買っていた。

姉とそこで別れ、家まで帰った。

19時、友人と約束していた焼き肉店へ。

父の病状が悪いかもしれない話をする。

きっと大丈夫だよ、でも来週は泣いてるかもね？なんて冗談で話していた。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

バイクだと父が心配するので
今日は、電車で行って駅からタクシーで病院へ。

母と姉はもう病室に居た。
本当は土曜日に胃カメラを飲む予定だったが
何故か月曜日に伸びた、とのこと。

病院に見舞うのは、慣れてなく、
することがないのでなんとなく会話や身の置き場に困る。

僕は、父の病状を聞いてから
あらゆる情報をネットで検索しまくっていた。

胃がん 腹水
腹水 原因
がん 治療
がん 症状

悪い情報ばかりが目につく。

途中で見るのをやめた。

たわいない会話だけして、この日は姉と、バスで帰った。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

今日は父が胃カメラを飲んだ。

ぐったりしている父。
また腹水を少し抜いて、食べられるようにはなったが
胃カメラが苦しかったので、ちょっと弱っている感じ。

体力をつけるためのリハビリの先生が来たが、父は
今日は胃カメラを飲んだし、疲れているので、やめておく。と断っていた。

確かに具合が悪そうで、なんだか急に老人に見えた。
よく見ると、骨と皮だけになってすごく痩せている。
いつのまに??

そしてひげにも白髪が出ていて、眼の色が薄く感じられた。
なんだろう、まるで死神に憑かれているみたいに見えて
父の顔を見るのが、すごく怖かった。

父の体がとても弱っているのが一目でわかるようになっていた。

9/4 胃カメラの検査結果 ガンの診断

9/1に飲んだ胃カメラの検査結果を
姉と2人で聞く日が来た。

母は落ち着かず、父の病気に関して拒否反応が出ているのか
ちょっとショックを受けているようなので、
医師や病院とのやりとりは、姉が中心になって行うことになった。

今日は5時過ぎに、一般診療を終えた医師が、部屋に説明に来てくれる予定になっている。
姉がこっそり事務員さんに
「もし、重い話だったら別室でお願いします」と言った。

僕は医師がこの部屋に来るよう、願っていたが

コンコン 「では、説明しますのでこちらへどうぞ」と別室に呼ばれてしまった。
心臓がドキドキしてきた。

「じゃあ説明聞いてくるね～」と、姉と僕が2人で別室に行く。

父は今何を思っているのか。
なぜ本人も一緒に聞かないのか疑問に思わないのは
病院慣れしていないからなのかな？

ただ、ベッドから出ちゃだめだからなんだとあっていてくれればいいけど。

そして、並んで椅子に座り、画像をみながら医師の説明を聞く。

まずは腹水の検査の結果。

水自体には、がん細胞もなく、綺麗でとくに悪い成分は入っていない。
血液検査での腫瘍マーカー（がんだと上がる数値、と予想）も、あがっていない。
この説明には「これは不思議なんです」と頭についていた。

そして、胃カメラの結果。

PCモニターに画像が次々と上がってくる。

とてもきれいなピンク色の、食道や胃の中の写真。

思わず姉と、きれいな色だねーなどと話していた。

そして医師がこちらを向き、話しだす。

組織を検査したところ、悪い細胞であった話。

そして、胃の粘膜がところどころ盛り上がって、波を打っている写真。

カメラを上に向けたところ、入口付近に白く変色した細胞が

固まっていて、大きく育っている写真。

まず、粘膜が盛り上がって波を打っているのは、

胃の壁の筋肉の中でがん細胞が育っていて粘膜を外から押し上げているから。

入口付近のがんの大きさは相当なものである。

腹水で押されたことと、以上の複数のがん細胞の固まりのせいで、

胃が相当小さくなっているので食べられなくなっていた。

腹膜にも転移が認められる。

診断結果としては

胃の低分化腺癌 そして 腹膜播種

がんのステージとしては最終ステージ（4とか5とか数字は言わなかった）と判断される。

低分化腺癌は、がん細胞が増殖した場所を

硬く伸縮性のない、動かない組織に変えてしまうので

そのせいで胃の運動が妨げられ、消化がしにくくなる。

一度固まった場所は、もう柔らかく戻らない。

つまり、胃がどんどん運動できなくなっていてそれがとても広範囲になっている。

食べても消化ができなくなっている。

がん細胞部分は、血管がたくさんあるのだが

今、その組織がとても薄くもろく出来ており、何かが触っただけで出血を起こしてしまっている

。

(胃カメラだけで相当、出血したそうです)

そして 腹水にはがん細胞が浮かんでなかったのが不思議なのだが
すでにごん細胞は胃を突き破り、周りの組織へ侵食していて
腹膜播種 (内臓の周りを包んでいる袋のような広い膜に無数に散らばり、種を撒いたように転移
している)
をすでに起こしていること。

胃だけなら、手術で取り去ることもできるが、腹膜は取り去るわけに行かない。
治療をするならば、抗癌剤と放射線治療しかない。

ただ

あまりにも我慢して放って置いてしまったのと、ずっと食べれなかったせいで
体力がものすごく落ちてしまっている。心臓や肝臓、腎臓、膵臓にも影響が出て、弱ってしまっ
ている。
腹水も吸収されず、栄養が体に入っていない。

本来ならば、すぐにごんを抑える治療をしましょうと言いたいところだが
ここまで体力が落ち、食事がろくにできない状態で
いくら栄養を点滴で補給し、筋肉を取り戻そうとしたとして
考える治療ができるようになるまで、からだに耐えられるかは、とても心配なところだと。

それでも進行性の癌でなければ、体力が戻るまで待つことができるが、
この「低分化腺癌」の悪性度は強く、進行性はとても早く、
もし待てたとしても
胃や腸を塞いでしまったり 血管を塞いだり、
大出血を起こしたり 他の処置がその前に必要になりそう。

そのたびに化学療法は伸ばさなければいけないので、治療に入るまでが難しいと考えられる
。

正直な所と言えば、今から体力をつけて、
治療に耐えられるところまで持ちこたえる時間は、なさそうだ。

もちろん、それでも最新医療や化学療法を受けることはできるが
選択肢としては

・ 治療はしないで延命措置 ・ ホスピスで緩和ケア

の2択であると言うしか無い、と。

余命ということ言えば もって2-3ヶ月。

今の状態では脳出血、胃からの大出血、血栓、心臓がもたないなど、急に、という恐れも大いに
ある。

あとはどうするかを、ご家族で話し合ってください。と、ということで話は終わった。
告知するかしないか、決める必要もあると。

また次回、今度はソーシャルワーカーさんと交えて相談するので
そのときご家族で相談した結果を教えてくださいと。

聞いている途中で、スマホにメモしていた手が動かなくなった。
メモを見ると、低分化腺癌 と ホスピス の2つだけ、入力してあった。

僕と姉は、「ちょっと話そうか」と、病院の外の公園に歩いて行った。
自動販売機でコーヒーを買って、並んで歩いていきベンチに座る。

座った途端僕はたまらなくなっていて泣きだしてしまった。

「まさか、余命とか言われるなんてね」

「でもパパの様子を見てたら、なんとなくそんな感じもしてたよね」

あと何を喋ったか、よく覚えてないけれど
医師の話したことを復唱するように こうだっけね、こうだっけね。と。

僕は涙が止まらなくて、
おとなしくしゃべっていても、ぼろぼろとあふれて出てしまう状態だった。

姉は遠くを見ながら無表情だった。

「あんた その顔じゃパパのそこ戻らないほうがいいよ」
「だよね～、暗くなったからバイクで先に帰ったって言ってよ」
「いや、さーくん、その様子じゃバイクで帰れないでしょ」
「・・・うん、そうかも」

泣き止もうとしても、涙が勝手に出てきてしまう。
もう、明かりのない公園では、景色が真っ暗になってしまった。

子供の頃から、姉といると、いつも僕が泣かされて
姉が泣いたところは記憶に無い。
5歳離れているせいか、いつも決定権は姉にあり、
姉の後ろをついていくだけだった。

「お姉ちゃんも泣いといた方がいいよ」と言うと
「真っ赤な目でパパの病室に戻れないから 泣けない」と言った。

僕はもう今日は病室に行けないな・・・と思うと
やはりどうしても 父に会ってから帰りたくなり、

「泣き止むから待ってよ。暗いからあんまり顔見られないし、すぐ後ろ向けば平気だよ。
バスと一緒に帰るからもう少し待って」と言って
急いで、涙を拭いた。

「あ、さーくん、コウモリがいるよー」と姉が言った。

「ええ???野生のコウモリなんてここらへんいるの??」

「いるみたいだよ。ほら、飛んでる」

ひらひら飛んでいるのはちょうちよだと思っていた僕は、コウモリと聞いてあたりを見回した。目を凝らして暗闇を見ると、羽ばたく黒いものが公園に無数に飛んでいた。

「野生のコウモリなんて、初めて見た！」

「夜になると、旦那の家（金沢区）の方でも見るよ」

「まじでー！知らなかった！」

などと言っているうちに涙が乾いたので病室へ行き、父に笑顔でまたね！と手を振って帰った。

振り向いてドアを閉める時にはまた、涙が出ていた。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

11時頃、実家へ母を迎えに行き、一緒に病院へ。

父が欲しがっていた目薬、それとお散歩の時に羽織るためのニットジャケットを買って、駅から病院行きのバスにのる。

乗ってる時間は長いんだけど、駅からは1本なので便利。

病院に着くと嬉しそうな父。

趣味である、囲碁のテレビを見ていろいろ突っ込んでいる。

父は囲碁がとても強く、段持ちで、大きな大会で優勝したこともある。

祖父も囲碁が好きだったらしく、その影響らしい。

僕は五目並べ以外、全くルールを知らないけど。

突然母が、「そうだ、部屋の写真とっところ」と言って父のベッドに携帯を向けシャッターを押した。

そうだ……。父の写真も声も、いっぱいとおこう！って、僕も思っていたんだ。自分もすかさず、カメラを構えようとする

「何だ、死ぬ前だからって写真でもとっとくつもり？」

と笑わない顔で、父が言った。

一瞬で涙が出そうになったけど

父は母のほうを向いて言っていたので、急いで窓の外を向いた。

母は「こんな豪華な部屋だから記念に撮るだけじゃないの～」と笑って言い

父も何かを感じたのか、今度は笑いながら

「人を勝手に殺さないでよ！？まだまだ死なないよ！」

と言いながら ベー！と母に舌を出していた。

数時間一緒に過ごし、

体力をつけるため歩こう！（腸を動かすため医者に言われている）と言うと

「お前たちが帰るときに下まで見送って、それからコンビニに行ってみるから、そのときね」とのこと

まだ、入院フロアからは自分では一回も出たことがなかったそうだ。

すぐさまナースコールを押して

「見送りに行くから点滴とってー」だって。わがままなw

「いや、バスは後のにするから、点滴は終わるまでやってていいよ。

それにその1パックもどうせ請求されるんだから、最後までやって！w」

っていうと、肩をすくめて

「そっか！じゃあ最後までやったほうがいいね！」と笑った。

看護師さんも笑いながら戻っていった。

点滴パックを見ると、いろいろな栄養が入っている。

胃が、がんや腹水に押されてとても小さくなっているのと、

消化できる面が減っているため

少しくらい食べても、体に吸収されるのが大変なようだ。

30分後、看護師さんが点滴をとってくれたので

じゃあ帰ろう、となり

父はお財布を握りしめ、嬉しそうに立ち上がった。

バスの時間までの数分、3人でバス停の見える院敷地内のベンチに座って時間を待った。

父は、まぶしそうに遠くを見ていた。

今、何を考えているんだろう。

母が「外はもう寒いね」と言った。

告知したら、父の目に見えるその景色は変わるのかな。

バスが来るのが見えたので、バス停に歩いて行った。

父はベンチに座ったまま、見送ってくれた。

バスに乗る前、父を振り返ったら まだ座ってこっちを見ていたので

またね、と大きく腕を振った。

父も、手を上げて振ってくれた。

何をするにも、「これが最後じゃありませんように」と願ってしまう。

来れるだけ、来よう。

仕事があるけど、今は、父との日々が優先。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

17時過ぎ、医師とソーシャルワーカー、姉との4人での面談。
余命が限られた中、今後どうしていくのか。告知はどうするのか。
そういうのを家族と一緒に考えてくれるのがソーシャルワーカーさんらしい。

まずは、こちらの意見を求められた。
姉と僕では、全く意見が割れている。

2人で話し合った中でまずは姉の意見を言う。

姉の意見

「父はきっと生きる気力を失い、急激に弱っていくだろう。早死にしてしまうと思う。
もしかしたら迷惑をかけるのが嫌で、自殺も考えてしまうかもしれない。だから告知はしたくない。
がんなんて、父にしてみたら死刑宣告のようなものだ。治る希望を持ったまま、最後まで明るく生きて欲しい」

自分の意見

「ベッドの上で動けなくなってから、自分が死ぬと気がついて、
あれもしたかった、これもしたかった、もう出来ない・・・、と
後悔して死んでいくのは可哀想だ。そして、最後まで嘘をつくななんてたぶん、僕には出来ない。
。 真実はありのままに伝え、お互いに隠し事をしない状態でいないと、疑心暗鬼になって頑張れないと思う。」

その後も、お互いに相手の意見を尊重し、だけど信念は持ち、ずっと意見交換をしていた。
何も言わずに医師とソーシャルワーカーさんは聞いてくれていた。

自分と姉はいつまでも平行線。

でも、父のことを想って言っているのはお互いにわかっているので、喧嘩のようにはならない。

「このような感じで、姉と自分で意見が2つに割れていて・・・決まっていらないんです」と医師に言うと

「そうですね、どこのご家族もそうです。でも心のなかを全部話し合って、最終的に決めてくださればいいので、今日は話したいだけ話してくださって構いませんよ」と、言ってくれた。

また色々話しているうち、姉が医師に意見を求めた。

「先生はどう思いますか？」

医師は、「僕も全く同じような体験を祖母でしているんですが」と、話し始めた。

「最近の主流としては、やはり、告知をする。という方向になってきています。」

「それは、治療をするにしても、ホスピスに入るにしても、

患者さん自信が納得して行って欲しい、という方針の医師が多いからです」

非常に言葉に気を使って話してくれているのを感じる。

「少しでも治療をする気があるとしたら、言わないと本気で病気に向かってはくれないと思います」

「ただ、希望を持って最後まで明るく居て欲しい、というお姉さんのお気持ちも、ものすごくわかります。

当然のお気持ちだと思います。あとはご家族が皆さん納得できるまで、とことん、話し合うだけだと思います。」

話を聞いて、姉も言った方がいいことには傾いてきたようだ。

僕は、決定権を姉に託すことにした。

これは、ずるいけれど、姉が心を決めるきっかけになるはずだ。

「じゃあ、告知の時期は全面的におねえちゃんに任せるよ。

おねえちゃんが納得できるようになったら、日を決めて、僕に伝えてくれればいい」

「うん・・・じゃあ、そうする」

とりあえずホスピスはどこも2-3ヶ月待ちなので、入るかどうにかかわらず予約をした方がいいこと。

告知して少しでも治療をするなら、時間がないこと。

僕は聞いた。

「例えば、父が治療を希望したとして、今の状態で何が出来るんですか？」

「それは正直、非常に、難しいところです。通常、放射線治療は2週間を1セットとして行うんですが、

まず、その1セットを受けられる状態かどうかは、検査してみないとわかりません。

飲むだけの抗癌剤や、今は他にも色々がんの治療法はあるんですが、手術ができない以上、残念なことにこのガンに有効なものは、現在、ほぼありません。

受けられる状態かどうか、僕の私見でも5分5分。最後のチャンスがギリギリあるかどうか、というところです。

ただ、もしこれで癌だけをやっつけられても、他の臓器にはダメージが行くので、今の状態だとそちらが先に

やられてしまう心配もあります。

それで今より回復を目指せるかどうか、という話になると、難しいでしょう。」

この医師は、非常にわかりやすく、正直に、聞きたいことを汲み取って簡潔に話してくれる。

告知をいつ、どのようにするかどうかを、決めたら

ソーシャルワーカーさんに伝えることにして、話が終わった。

こんな事実を聞いても、僕は、あきらめたくない気持ちでいっぱいだった。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

介護認定の申請で、区役所に行く。

ソーシャルワーカーさんに昨日、退院した場合の事を考えて、すぐに出すように言われた。

順番が来て、保健師さんに「お父様の現在の状況を教えてください」と、聞かれ話していたらまた、涙が出てきてしまった。

父や母の前で絶対に泣かないことに集中しているせいか、他の場面ではすぐ、涙が出てきてしまって困った。

1ヶ月前まで、とても元気に好きなことをしていた父。

まさか急にこんなに具合が悪くなるなんて思わなくて・・・と。

介護保険の概要さえ、全く知らなかった。

とりあえず、告知された父がどうしたいかを聞いてから動くので色々なケースを想定して、準備する。

自宅へ戻るのに、介護サービス、訪問医師、訪問看護師との契約が必要。

通常は、申請が降りるまで1ヶ月半ほどかかるが、現在は更に混んでいる。

お父様には時間がないようなので、急いで面談を行ってほしいとのこと。

連絡先を聞き、家に帰ってから電話をすると認定員さんが11日に、病院に来てくれるらしい。

区役所から話が通じていたので、予定をすぐ前倒しで入れてくれていたそう。

区役所の担当員さんがこんなに親身になってくれるとは思っていなかった。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

父に、告知をする日がやってきた。

姉も色々急がなければいけないことを知り、告知をする日を今日、と決めた。

僕は姉が来る前に、病院の近くのファミレスに入り

最終確認をするために、姉にそこに来てもらうようメールした。

余命が限られてることは言うけど、期間の予想は、言わない。

病状・病名は医師から正直に説明してもらう。と、いうことにした。

17時半。病室に医師が来てくれて、病状の説明、病名の宣告をする。

医師から、胃がん 最終ステージ 腹膜播種 つまり転移している末期がんである、との話をされる。

父は一瞬驚き、喉をごくん、とならした。

父は医師が何かを言う前に

「もう、いいです。何もしなくていいです。先生、今まで本当にありがとうございました。感謝しています。」

と、ベッドの上でおじぎをして言った。

そして、誰も何も言わない中、聞いても居ないのに、どンドンしゃべりだした。

「私にはね、がんで死んでいった知り合いがいるんです」

「元気だったのが、あっという間に悪くなって死んでしまったのを知っています」

「どうせ死ぬなら、もう切ったり、抗癌剤で苦しんだり

管に繋がれてまで、ベッドに寝ていたくないから

治療はしなくていいです。延命もしなくていいです。早く家に戻りたい」

「でも、もし先生がどうしても飲んでみろっていう薬があったら、飲んでみるけれども・・・。」

最後の一言に

受け入れながらも、諦めきれない気持ちが見えた。

その後、父は自分の話をし始めた。
小さいころ、溺れて死にかけた話。
親の話。
仕事の話。
IPS細胞の話。

山中先生がIPS細胞を発見するのがもう10年早ければもしかしたら、とか
手遅れだなんて・・・とか
俺が、がんで死ぬなんてなあ、とか
でも好きなことはやってきたから、未練はないよ！と言ってみたり

とりとめもなく、ひとりでしゃべっているのを
先生も、父を見つめながら静かに聞いていた。

先生に話すには病気と関係ない話が長く続き、気になってきて、
「すみません、先生、ご予約があるのでは？」と聞くと
「いえ、今日は何時間でもお話聞きますよ！」とってくれた。

父の中で一生懸命、受け入れようとしている姿
ときどき、言葉をつまらせて
涙を我慢しているのがわかったから

自分も姉も、泣かなかった。

ショックだろうから、一人にさせるのも心配だ。
僕も姉も、今日は病室に泊まるつもりで居たのだが、
2時間ほども話に付き合ってくれた医師が帰ると、父は
「もう直さなくていいから早く家に返してくれ。でも、ママにだけは、絶対言わないで。
ママが泣くところは、本当に見たくないんだ」
「さあ、俺は寝るから、お前たちも早く帰りなさい」

と言った。
一人で泣きたいのかな と思った。
僕にもそういう時がある。

バイクで来ていると、
父は帰り道を、とても心配するから
姉とバスで帰るよ。とわざわざ言って、またバイクを置いて帰った。

姉も僕も真っ直ぐ帰る気にはなれず、レストランに入る。
2人とも、口数は少なかった。

「お父さん、自殺なんかしないよね？」

「僕がさっき、看護師さんに、こういうわけで。って言って、

見回り多くしてもらうように頼んで、わかりましたって言ってたから、大丈夫だよ」

「やっぱり泊まればよかった」

「一人になりたい時も、あるよ。」

「そうかな」

「そうだよ。お父さんと同じ性格の僕が、保証するよ」

でもさ。

お父さん、あがいてくれても良かったんだよ。

思い切り泣いてくれても、命乞いしてくれても良かった。

僕は諦めるつもりはないよ。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

介護認定のため、区役所から担当の方が病院へやってくる日。

病室で待っていると、約束の時間に、40代位の女性が訪ねてきた。

介護福祉士、看護師でもあるらしい。

「家に帰るためのベッド借りたりするのに、区役所の人が来たよ。」

挨拶をしたあと、父に病状を尋ね、書類に記入していく。

そして病室を出て、2人で話す。

「余命は2-3ヶ月とは言われていますが、思ったより悪くなるのが早いんです。

でも、とても自宅に帰りたがっているので、なるべく間に合うように返したいんです。

帰りたいたのに帰れなかった、ということのないように」

と言うと

「そうね。私もそう思います。まだご本人ははっきりしているけど、様子を見ると、急がないといけなさそうね。

私も出来る限りのことは書いておくし、認定も早く出ると思います。

末期がんは特別な措置がありますから、

最低でも介護1は出そうなので、もうある程度は動いてしまっていていいですよ。」

「はい、13日にケアマネージャーさんが決まって、説明を聞く予定です」

しかし、こういうときって、手続きが多すぎる。

毎日何かしらすることがあって、仕事ができない（笑

というか、僕が自営業じゃなかったら大変だったな。

父はまた、明るいうちに帰れ！危ないから！という。

心配してくれてありがとうね。

気をつけて帰るよ。

やっとバイクに乗って帰る。一週間ぶりに。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

9/13 ケアマネージャーさん決定

朝、姉と一緒にケアプラザへ。

介護保険というものに対して全く知識がなかったので、色々説明を聞く。

ケアマネージャーさんを、紹介される。

- ・父は要介護認定がおりるでしょう
- ・まずは自宅で受け入れ体制を整えるのが先決。控えめにならもう使っても良い
- ・訪問医師と訪問看護師、そして万が一のホスピスを予約すること

姉！！ホスピスどうなってんの！何もしてないじゃないのw

午後は実家で父の部屋を片付ける。

今のままでは、介護ベッドを入れるスペースがない。

診察もするだろうから、部屋はほぼ、開けなければ。

まずは、どかす家具を入れるため、物置にしている部屋で不要品をチェック。

いくら部屋が空いてたからって、両親よ、いらぬもの貯めすぎだよ！

とにかく「思い出の品」以外はどんどんゴミ袋へ。

古いクルマ用品、古い工具、古い家具、古い電化製品、お歳暮などで頂いた品。

本当に・・・こんなものとおかなくていいのに、というものがたくさん。

僕が小学生の時使っていた子供用ギターや、僕がもう売ってしまった車のチェーン、

テニスラケット・・・。

捨て方さえ、わからないw

気が遠くなった。

姉によると、父は手術で肩にポートをつけて

点滴ではなく、そこから栄養を取るようになるらしい。

自宅に帰るならそれがベストとのこと。

もちろん感染等のリスクはあるが、
カテーテルで太い血管に栄養を入れるほうが負担が少なく、
もっと栄養価の高いものや薬剤なども一緒に入れられるようになるらしい。

早く。
少しでも良くなるなら、体力が無くなる前に、早くして。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

倉庫部屋の次は、父の部屋のものを動かさないといけない。

母は昼ごろに家を出て病院に行くというので
実家の鍵をなぜか持ってない僕は、
お母さんが家を出る前に、鍵をもらいに行くからね！と念を押していたのだが
11時に実家につくと、すでに家を出ていた。

なんで僕を忘れるの・・・。

急いでバイクで追いかけていき、駅に行ったがもうバスに乗ったという。
結局病院まで取りに行った。
父がまたバイク危ないのに・・・
お前がちゃんと運転してても、相手が下手くそだったら事故になるんだからな！とうるさかった
。

僕が鍵を受け取り、帰ろうとすると母が「じゃあ私も帰る」と言い、
「ついたばかりでなんで帰るの？そんなだったら来なくていいよ！」と
父を怒らせていたw

父は洋服がすごい好きで、クローゼットいっぱい洋服が詰まっている。
まずは、悲しいが夏服はもう着ないと思うので、半袖を全部プラケースにしまう。

半袖シャツだけで百枚はある。
そして帽子や、夏用ズボン、サマーセーター、ベスト等々

そして2つある、洋服ダンスにもまだ詰まっている。
まずは着る服だけクローゼットに入れて、洋服ダンスは2つとも、部屋から出さねば。
そして、捨てよう。どうせ父がいる間に、ベッドがなくなることはない。

実家を出てからは、実家での2人の生活について興味を持っていなかったので
母に色々聞くと、父は相当な家事をしていたようだ。

何も知らない母は、「父がいないとあれもできない、これもできない」と途方に暮れている。

気にするのはそこじゃないでしょ！と思いながら母が知った時のことを想像してしまう。

こういう母って、男から見ていわゆる「守りたい女」なのかな。

父は母を、甘えさせすぎている。

失礼を承知で言えば、

守りすぎて守りすぎて、何も出来ない女になっている。

夫婦にしかわからないこともあるだろうけれど

母は、父を頼りすぎている。

だからこそ、父は、残していくのが不安になるのだ。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

今日は快晴なので、またバイクで病院へ。

父が心配するのはわかっているんだけど

父と過ごす時間を少しでも長くしたいので、ついバイクで行ってしまう。

病室につくと父は、腹水を抜いてもらっていた。

また溜まりすぎてパンパンになり、苦しかったので抜いてもらったとのこと。

2リットルの水をお腹から出して、針を抜いた。

黄色く透明な水。

血はまだ、混ざってないようだ。

父は右耳が聞こえにくくなっているそうなので

左側に椅子を置き、父の顔の横に座り

ベッドに、うつぶせに寝る体勢にしていろいろなことを話した。

今看護師さんが部屋に来たら、

父親に甘えている子供の図なんだろうなあ、と思いながら。

いくら話しても話し足りない。

そのうち、涙がポロポロこぼれてきてしまった。

ベッドシーツにどんどん染みこんでいった。

深呼吸しても流れ続け、止まらなくなった。

「さーくん、眠いんじゃないか？ここで寝ていてもいいよ。」

とうとう、息が乱れ、父の前で号泣してしまった。

「パパがいなくなるなんてやだよ！」

「1日でもいいから長く生きてよ・・・！」

しゃくりあげながら、子供のように言ってしまった。

言ってもどうにか出来るわけじゃないのに。父が困るだけなのに。
でも、言ってしまった。

父が死ぬことになっても、誰も泣かない。誰も叫ばない。隠して笑ってさえ、いる。なんで？
父がもうすぐ 完全にいなくなるのがわかっているのに、誰も何も変わらない。

なんで、今までの一生で一番なくらいに悲しくやしい感情を、隠しておかないといけないの？
あなたがいなくなるのが、つらい寂しいって、だから居なくなるまで、ずーっとそばにいたい
って、
なんで力の限りに叫んじゃダメなの？？？
あなたの心がこの世で動いている限り、コミュニケーションを取りたいんだよ。
僕にあなたの知識、経験、考え方、全てを残らず伝えて欲しいんだよ。

僕は、父がガンで余命が短いと知ってから、
きつとずっと、こんな感情で日々を送っていた。

気持ちを隠して置かなければいけない、大人の事情なんていらぬ。
未熟な僕にはしまいきれず、とうとう、溢れだしてしまった。

父はまっすぐ遠くを見ながら
「しょうがないよ。お前より先に死ぬのが順番なんだから。」
「お前が泣くのが一番辛いから、泣かないで」と言った。

僕はそのまま父の枕におでこを乗せながら泣いていた。
父はそのまま
残す家族が心配だ、お母さんが特に心配だ、と、話していた。
男一人だからしっかりやれ。あとは頼むぞ。と。

お父さんの顔をすごく近くでずっと見ながら
泣き止んで、話した。

「僕、お父さんに似てよかったよ」
「そうか」
「見て？鼻なんて、お父さんのコピーだよ。僕、この鼻好きだよ」

「そうだね、この鼻はね、お父さんの母親と同じなんだよ」

「性格もお父さんに似てよかった」

「そうか、それは嬉しいな」

「きっと僕の子供もこの鼻になるよね」

「そうだなw」

お父さんが笑ってくれた。

ずっと気持ち悪く、お腹がいたいようで

お腹をさすっていた。

吐きそうにもなっている。

何かを口に入れると、吐いてしまうので食べたくないという。

でもそのおかげで急激に体力がなくなっている。

好きなものでもお菓子でもなんでも良いので、食べれると良いと医師が言っていたそう。

でも母と姉によると、何を薦めても一口も食べないそう。

「ねえ、ヨーグルトなら一口食べれる？一口食べると1日寿命が伸びるよ！」

そう言うと、父は笑って

「うーん、戻しちゃうと思うけどな、食べてみるか」

ヨーグルトを開けると、神妙な顔。スプーンで一口食べる。

ゆっくり飲み込みながら、徐々に口で味わっているようだ。

「その一口で今、がん細胞が1万個やっつけられたよ？」

「1万個か〜！」

「1日一口でもいいから、毎日やっつけたら進行もきっと止まってくれるよ」

「うん、今度は飲むヨーグルトのほうがいいな、もっと飲めるかもしれない」

「わかった！」

嬉しい。ひとくち食べてくれた。

これが今僕のできること。

その後も話しを続け、吐かないことを確認。

「あ！胃が動いてるよ。一生懸命頑張って、消化しているんだねえ」

「ほんとだ、動いてるね」

「もし戻しちゃっても、菌がはいった分は働いてくれるから大丈夫！」

「そうだね！毎日挑戦しよう！」

父はガッツポーズをした。

腹水を抜く針を取りに来たあと、医師がナースステーションにまだいたので、声をかけて、少し話をした。

「肩の手術の日は、決まりましたか？」

「外科との兼ね合いになるのでまだはっきり言えないですが、今週中にはできそうです。」

「ずいぶん悪化したようにみえるのですが、予定より短かそうとかはありますか」

「そうですね……。日に日に悪くなっていますね。そうかもしれないです……。」

「痛みだけでも、なくしてあげられるようによろしくお願いします。」

「はい、わかりました。」

「あと、家から近いホスピスは人気らしく、初診受付だけでも2ヶ月後とのことですよ。お手数ですが、ここの提携のホスピスで予約したいので、紹介状を願いますでしょうか」

「わかりました。そうしましょう。じゃあ手続きしておきますね」

ホスピスの件は姉にお願いしていたのだが
全く話が進んでいないようなので、僕がやることにする。

大病院は、もっと医師との関係は薄いものだと思っていたので
いつも丁寧に対応してくれるこの医師に
ありがたい気持ちでいっぱいだった。

9/16 実家の片付け

今日は実家の片付け。

それから、廃品回収の業者を呼んだ。

事務机や古いテレビなど、軽トラに積めるだけ積んで、いくらって感じ。

まだまだ荷物はいっぱい。

粗大ゴミの申し込みをできるだけして、

片付け、掃除、片付け、掃除・・・

母と姉は病院へ。

昨日の話をして、飲むヨーグルトを買っていくように言ったが

今日は、飲まなかったらしい。

次の日17日も片付け。父の部屋にベッド用空間を作る。

父の部屋の、こまごました荷物を全部倉庫部屋に持っていく。

じゅうたんを変えてほしいとの事だったので、

古いじゅうたんを剥がし、床を掃除して、殺菌お掃除シートなどで部屋中を拭きまくり、

防虫防ダニシート、保温シートを買いに行って

それを敷いてから新しい絨毯を敷く。

これでベッドを置くスペースができた。

体使い過ぎ。疲れる。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

午後から母と病院へ。

15時から、相談室で僕だけソーシャルワーカーさんと話す。

ホスピスの予約は取れたこと。初日は家族が行けば良いらしい。

予定日は10/14だけど、間に合わないかもしれないからもう少し早くなるよう頼んでくれるとのこと。

あと家の様子を聞いてきたので部屋が作れたことを話した。

肩のポート手術は明日。

退院日が24日に決まる。

訪問医は、近所の〇〇クリニックの院長先生。訪問には何科の先生でも良いのだが、家で腹水を抜くとなると、その先生しかいないらしい。

学会などで講演をしている、在宅緩和ケアのエキスパートらしい。

父に退院が決まったことを話したとたん、元気になって色々しゃべりだした。

母と銀行のことで喧嘩。父が管理していたのだが、昨日、母がなんか頼まれたのを間違えたらしい。

そんなに怒って大丈夫だろうか。

起き上がり、ヨーグルトドリンク半分を飲む。

僕と約束したので、僕がいると飲むのだろう。と思って嬉しかった。

栄養士さんが、栄養補助ドリンクを持ってくる。

これが毎日ご飯代わりに飲めれば、嫌がる点滴を外してもいい。とのこと

バニラ、いちご、ぶどう、ヨーグルト味など見本をいろいろ。

父はかたっぱしから飲んでみて、甘すぎて無理かもしれないけど飲んでみる、と好きな味を選んでいた。

家で行うために、点滴をポートに付け外しする練習を僕がさせられる。

見本のシリコンで出来た患者の肌に、まず消毒し針をさしてセットする練習。

あ、これつけていても、肌に針は刺すのね。

そして、ヘパリンロックという、血を固まらせない液剤を管に注射してから、点滴と針を外す練習。

むずかしそう　そして怖い

今日までの入院費、概算〇〇万円。部屋代たっかーい

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

9/19 ケアマネさんが部屋を見に来る

毎日用事があって、仕事は帰ってからやるのだが間に合わない。
疲れてやる気が出ない。

ご飯も、ちゃんと食べてない。

この日は、ケアマネさんが家に来た。

母の腰が昔の怪我で痛いこと、家事ができないこと 色々話す。
父の病状を踏まえて、ヘルパーさんが家のことをしてくれるようになるらしい。
ただし、父に関わることだけ。
掃除も洗濯も、父のものだけ。

父の、ベッドが来た。

次の日、20日は

母が一人で父の病院に行くというので、何もしない日にした。

パソコンをリカバリするも、やはりゲームをする時だけ、落ちてしまう。
完全に、ゲームのせいで壊れてきてるw
今壊れるのは、やめてよー。

結局、リカバリとインストールで休みの一日が終わる。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

9/21 ポートの練習、訪問看護師

入ると、父は起き上がって囲碁を見ていた。

画面の名人について、強いな！と褒めている。

ものすごく機嫌がいいようで、いっぱいしゃべっていた。

家に帰っても、日曜だけは、これを絶対見るからな！と宣言していた。

がんについてや、余命についてなどは、全く話さない。

クロスワードパズルの雑誌を買ったので、父に色々 答えについて、質問をする。

2人で最後までやった。引き戸が開かないようにするつかえ棒のことを何と言うか??で相当悩んだ。

今日も点滴の練習。

針をいじるのは怖い。抜き差しの時に針が表に出ないような、

クリップのような形になっているのだけど。

9/22

訪問看護師さんが病院に訪問。やはり立会が必要なのでこの日も、病院へ。

姉も呼んでおく。

父の様子を見て、病状を把握して下さった模様。

月曜日は針の交換の日ということで、

姉が初めての練習なのに、いきなり父本人に、針を刺すのをやらされていた。

怖い怖い、と言っていた。

ホスピスの初診日は、9/29に早めてくれたとのこと。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

朝10時前に病院につく。

父はそわそわ、もう着替えていいか？と何回も聞いている。

ベッド周りの荷物を片付け、バッグにしまう。

必要な薬を出してもらい、精算を済ませ、着替える。

父は鏡に何度も向かい、帽子の向きを直したり、上着を正したり。

そしてサングラスを掛け、記念に病室内を写真にとった。

写真を嫌がっていた父なのに、ちゃんとこちらを向いてポーズ。

そして部屋を出て、看護師さんたちに挨拶をすると、

「わあ、ダンディだ〜！」と声上がる。

それしか言いようが無いでしょ、

退院の日に病室から帽子とサングラスの、こんな怪しいおやじw

姉旦那の車で帰るが、父は吐き気を我慢しているよう。

何も話さず、動かず。

家につくとベッドに腰掛ける。

すっかり変わった部屋を、色々見回していた。

1時に看護師さん、ケアマネさんが自宅を訪問。

もう少し柔らかいマットに変更するわね、と言っていた。

僕は色々することがあるので、姉に任せて自宅へ帰った。

父はしいたけの佃煮を食べるも、あとで吐いたらしい。

いきなり佃煮はきついでしょw

とにかく、家に、帰れた。ちょっと安心。

JUGEMテーマ：[がん全般](#)

10:30 実家へ行くと親戚のおばさんが2人、来てくれていた。
姉が今日、呼んだらしいけど、今日は忙しいから相手ができないかもよ、と言ってあったのに。
姉が来る日に呼んでください・・・。

美味しいまぐろ丼を買ってきてくれようとしたのだが、
父の前で食べられないことを話し、遠慮してもらおう。

母は、あまり喋らない。
しょうがないので僕が相手をし、経緯を話す。

おばさんは、大きなお見舞いの花束とお見舞金をくれた。
そういえば、花が登場したのは初めてだった。
父の部屋に花を飾る。
あとで、父にもらったお見舞金を見せると、
やったあ♪と言って中身をお財布にしまった。

14:30 訪問医が来る

父、黄色い点滴（以前より高カロリーのもの）のせいで体調が悪い。点滴はしない。と主張する。
。腹水を抜いてくれと、強い希望で明日、医院にいったら腹水を抜く代わりに点滴を続けることに。

廊下で医者と話す。
点滴を抜いてしまって、食べなければ1週間持たないよ。といわれる。
点滴と薬をうまくコントロールできれば、11月まで行けるかもしれないと。

ホスピスに入る時期を決定しておかなければいけない。
「自分のことができなくなったとき」＝おむつ着用になったとき。に入るのが最適とのこと。
いくら家族でも、その状態になってしまうと負担がかかり、無理が出てくる。
もし本人が嫌だと言っているとしても、ホスピスで看取る事になるのが大半だと。

医者は今晚、新しい点滴をつけるように言って帰った。
でも、自動で点滴量を管理する機械を

次の点滴から間につける予定なので、僕では、つけられない。

以前のものをつければいかと、看護師さんに電話して確認する。折り返しを待つ。

15:00

歩行器と、バス用チェア、柔らかいほうのベッドマットが届く。

トイレの手すりは、合うものがなかったようで、次回。

看護師さんから連絡。

・すぐ看護師を派遣するので、来たら機械と点滴をつけてもらうように。

・車いす、しびんを用意しておくこと。

との指示。看護師さんの到着を待ちながら介護用品のレンタル業者に電話する。

17:00

粗大ゴミを捨てていると、車いすが到着。

軽くてコンパクト。そしてデザインもかっこいいな。

とにかく粗大ゴミを片付けたのですっきり！

母がなにもしないので、簡単に夕ご飯をつくる。

小松菜と里芋のお味噌汁、お刺身、豆腐、ごはん。

父が豆腐と里芋を一口ずつ食べるがすぐに戻してしまう。

明日10時半に

父を連れて近所のクリニックに行かなければいけないので、そのまま泊まる。

夜中、父は3度ほどトイレに行き吐いている。

父が心配で、あまり寝られなかった。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

天気は良かった。

タクシーを予約し、10:30に車いすでクリニックへ。
さっそく腹水を抜いてもらう。

終わるまで時間がありそうなので一回帰宅。
ドラッグストアでしびん、衛生用品などを買っていく。

12:30に、迎えに行く。
向きが悪いのか、取れない場所に腹水がたまっているのか
今回は、1Lしか抜けなかったらしい。

少し楽になったようだが、前に抜いたときほど元気ではない。
専用通路に入って、エレベーターの真ん前にタクシーをつけてもらう。

帰りのタクシーを降りてから、家の玄関前で吐き気を繰り返す。
そのままトイレへ連れて行く。

14:00頃、ケアマネさんと工事業者、看護師さん到着。

お風呂の寸法を確認、次回、工事業者と下見に来るそう。
介護保険を使って工事する。間に合わなかったら実費だけど、
母も腰が痛いので、手すりは将来的にもあったほうが良いだろうしと思って、
とにかく申し込む。

15:00頃、ヘルパーさん到着。

ケアマネさんとスケジュール調整。
10/1から、毎日2回、ヘルパーさんがきてくれるそう
身体介護と生活介護半々で。

腹水が抜けた割にはあまり体調が改善していない。

夕方、薬局から薬が届く。

すごいな、薬も届けてくれるのか。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

父は朝から機嫌がよい。部屋を移動したり、ベランダの植木をいじったり。何の花が咲いたね、と母と仲良く話している。

ちょっと下の話があるので、お食事中の方はストップを。

父があまりわがままを言うので
小さい、ほぼ水分だけの透明な点滴を頼んであった。
それが届いたので、急遽、点滴をするために、
看護師さんがくる。

便秘で気持ち悪いというので浣腸をするが、それだけでは出ないらしく
看護師さんが指で掻き出してくれる。
それでだいぶ出たらしいが、痛みでぐったり。

本人はどうしても、栄養の高い点滴をすると気持ち悪くなるらしく
薬も、拒否。

父は、点滴や薬のせいで気持ちが悪い。もう点滴も薬も嫌だと言う。
看護師さんに向かって、愚痴を言いまくっていた。

看護師さんは僕に、

「ご本人の病気が進行して、体調が以前とは違ってきているんだけど、
やはりご自分の病気のせいと思いたくないので、点滴や薬のせいにしたいんだと思う。
これはみなさん、そうなの。だけど、もう残り少ない日々を、
嫌な気分でも過ごさせないためにも、わがままを聞いてあげていいと思う。」

と、言った。僕もそう思った。

もう、無理に飲ませたり点滴したりしなくていいと。
あと1ヶ月もてばすごい方。だから、気持ちよく過ごさせてあげよう、と。

介護が大変なら、すぐホスピスに入れたほうがいいのかの状況なんだけど、大丈夫？と聞かれ

たので

やれるだけやる！大丈夫！と答えた。

もう、あと2週間くらいと見ておいたほうがいいかもしれない。

もう、医者も家で本当のことを話しにくいので、

母に、父のことを話すことにした。姉にもLINEで 母に話すよ、と伝えておいた。

テレビを見ている母の後ろから、話しかける。

「あのね、パパね、もう長くないんだ。」

母は、ため息を付き、やっぱり・・・という感じだった。

「なんの病気だったの？」

「がんだよ」

「そうなの・・・こんな健康な人が、よりによって、がんにかかるなんてね」

「家で最後まで過ごしたいって言うから、僕が介護全部 最後までするから。」

「あとどのくらいって？」

「病院で入院したときには、もって2-3ヶ月と言っていたけど、もう2週間位だと思う。」

「そっか・・・。」

「お姉ちゃんも僕も医者から聞いていたんだ。ごめんね」

「うん、でも想像はついてたわよ、普通じゃないなって。」

「パパが、絶対にママに言うなって。ママに泣かれるのが一番辛いからって言うから言えなかった。」

「うん」

母は、テレビを見たまま、動かなかった。

「だからママ、なるべくいっぱい話してあげてね」

と言うと、すぐに立ち上がって父のベッドの側に行き

「〇〇ちゃん、どおー？げんきー？」と話しかけて、また怒られていた。

クリニックからポータブルトイレが届いたので部屋に配置。早速2度ほど使用する。

ドラッグストアで防水シートや紙テープ、うがい薬（肺炎防止に）などを購入
姉に、秋向けの寝間着を選んで買ってきてくれるよう頼む。

夜、気分が良くなったらしくマンションの廊下をお散歩してくると言い出す。

心配なので、玄関を出た父のあとをついていこうとすると、
「誰だ！俺の後をついてくる奴は！」と振り返り笑って言った。
「だって心配なんだもん」というと
「じゃあ玄関までは許してやる。玄関からは一步も出ちゃだめだよー」
というので、玄関を半分あけ、ずっと覗いてみていた。
わざと手を大きく振り、元気そうに歩いて行く父。

マンションの廊下は、向こうのはじめまで50mくらいあるのだが、
途中でカーブしていて、一番向こうまでは壁が遮って、見渡せない。
後ろ向きに片手を振りながら、歩いて行く父がカーブのところで見えなくなった。

忍者のように足音を立てないで走り、カーブのところでそっと顔を出してみると
父は、一番向こうの手すりから、外の景色をじっと見ている。

もう暗いので、周りのマンションの窓の明かりと 下を通る車しか見えないはずだが、
動かずにじっと、外を眺めていた。

そっと戻って、玄関のドアを閉めて待っていた。

ドアが開いて、「なんか誰かが途中まで来てた気がするなー」とか言いながら
ベッドに戻った。

母が切ったパイナップルを、一口食べる。

父も寝たので自宅に帰ると、PCつかず。困った。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

朝、急いで横浜の店に壊れたPCを修理に出し、その足で秋葉原に行き、目当てのPC店へ。

すぐ持って帰って使いたいので ノートPCを購入する。
修理に出したPCが直って戻ってくるとしたら、今買うのはノートのほうがいい。

帰って、買ったノートと仕事用のソフトや外付けHDDを持って、実家へ行く。
実家に着いてからは設定とインストール。
仕事がたまっていてやばい。

姉が来ていて、青汁やうどんを食べさせていた。

今度は、体が痛いのはベッドのせいだからベッドを返すという。
気持ち悪いのは薬のせいだといひ、薬を飲まないという。

昨日は点滴も気持ち悪くなって20分で外したし、とか（5時間やったのに）
治って戻ってきたのに薬が効かないから悪くなったとか（もう治療はしないと自分で決めたこと）
話していることが少しおかしい。

うん、うん、と聞いてあげたいのだが
薬も点滴も止めたら、寿命が短くなるのがわかりきっているので
どうも素直にわがまを聞いてあげられない。

インストールに時間がかかってしょうがない。
仕事ができずイライラする。

夜中3回ほどトイレに行き、吐いている。でも出るものが無いようでとても苦しそう。
やはり、心配で寝られない。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

9：30に看護師さんが来る。

点滴や薬の愚痴、昔話を聞いてあげている。

看護師さんってすごいと思った。

イライラして八つ当たりする父の気持を良く汲み取ってくれている。

薬や点滴のせいにするのが、訪問医の先生とぶつからないか。

先生とだけは、縁を切らないようお願いしてくれた。

訪問医の先生はとてもきびきび、自分の方針で進める人だ。

そんな先生に、素人の父が薬や治療の効き目を

頭から否定するのはやはり気分がよくないだろう。

11：30にホスピスの面談予約。

バイクで行ったが、場所はわかりやすかった。

施設はとてもきれい。広々明るく、気持ち良さそう。

家族用のキッチンとシャワー付きの宿泊部屋もある。

ここに今満床で入院している人たちが全員

死を待つだけなのだと思うと、暗い気持ちになった。

流れとしては、受付を済ませたら、入院したい、となったときに拒否することはない。

緩和病棟は全て個室で、いつも満床なので、まず一般病棟でもとにかく開いてる部屋に入ってもらい、緩和ケア病棟の空きを待つ。

先に有料個室へ入り、希望により、空けば無料個室へ・・・という流れだけど

父のように、時間がない場合、希望が通ることはあまりない。

危篤の場合や急変の時は一般病棟の個室に、ということになるらしい。

一時的にどの病棟に入院していても、緩和ケアの治療はちゃんとできるとのこと。

できれば、ここで楽になりながら最後をみんなでゆっくり見守りたいと思った。

やはり、いくらあきらめていても、最後は万全の体制で楽にしてもらいたい。

自宅では、突発的な呼吸困難や誤嚥などになっても、何もケアしてもらえずに苦しんで逝ってしまいそうで怖かった。

午後、医師が訪問。

いつもの先生ではなかった。

点滴を変えること、薬もパッチを使うこと（とうとうモルヒネ）

ますます言動があやしくなり、
栄養が脳に届いてないのだな、と感じてきた。

がんということを忘れており、
先生と話して自分が末期がんだと知り、また落ち込んでいた。

それから魂が抜けたように、静かになる。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

9/30 2日ぶりの点滴

朝から医師がきて、家で腹水を抜く。

腹水を抜いたら、点滴をするように説得。

しゃべるのが大変になってきている。

右に頭を持ってきたほうが抜けるかもって言ってたよ。と父に伝えたが

つらくて動きたくなさそうだったので、そのままにして

ちょっとコンビニに行ったら、その隙にひとりで動いてしまった。

なんで僕がいるときに動かないのか。

おかげで抜けた腹水を入れたペットボトルを倒してしまい、

じゅうたんがびっしょりと濡れてしまった。

看護師さんが終わり頃に来て、もっと抜けるかも！と、管に注射器をつけ、手動で一生懸命抜いてくれた。

1.5L排液したけど、お腹はあまり楽になっていなさそうだ。

小さい点滴をつけてくれる。

500ml 200kカロリーー

起き上がることもできず、しゃべれなくなってる。

筆談をする。

「正月までもつか」

もつよ、うんうん。と言っておいたけど

だめだよ、パパ。あと2週間がいいところだって。

本当のことを言って、言いたいことを全部聞き出したかったけど

この辛そうな中、聞き出すのも可哀想でどうしていいかわからない。

お腹の中が痛いらしい。

黙って部屋のポータブルトイレを使っているあたり、ほんとうに辛いのだろう。

こんなに早く、話せなくなるとは思わなかった。

看護婦さんが夕方、モルヒネ座薬を2つ入れてくれる。
そのあとずっと眠っている。

夜中の3時になって、心配で見に行くと
部屋のポータブルトイレの前に倒れていた。

びっくりして起こすが、トイレは済んでいるようで
ベッドに戻るときに眠くなったか疲れたかで床に寝てしまったよう。

ゆっくりベッドに戻したら、またすぐ眠った。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

父、10時に起き

昨日の夜早くからずっと眠っていたというと、そうか〜、と少し話す。

午前中、ヘルパーさん、看護師さんが訪問。

小さい点滴を落とす。

ヘルパーさんは父の分、掃除や洗濯をしてくれる。

部屋の家具やベッドまわりを除菌シートで拭いたり、コロコロでじゅうたんのホコリを取ったり
。

母は毎日人が来ることに少し、疲れているよう。

夜、少し起きています。

飲み物はやはり飲めない。

トイレは部屋にあるのに、やはり家のトイレまで、行こうとする。

歩行器を使い歩くが、足がおぼつかない。

ものすごく大変なのに、ポータブルトイレを使わない。

また夜中に一人でトイレに行き、途中で歩けなくなる。

とうとうベッドまで戻れず、倒れこんでリビングの床に寝てしまった。

抱き上げようとする、痛そうにするし、

自分では起き上がれないみたい。ベッドに戻るよ。と言うと、いやいやをする。

このままでは心配で、どうしていいかわからず、看護師さんに電話すると

「じゃあ、そこで寝かしちゃいましょうか！」と明るく言われた。

そうか、と思い布団をかけて「大変じゃなくなるまでここで寝ちゃおうか！少し休んで。」と
耳元で言うと、コクリと頷いて寝てしまった。

看護師さんの明るい声と、柔軟性に助けられた。

気持ち悪そうなので座薬を入れ、布団をかけると、安心したように眠った。

薬はアンペック座薬の10mg。繰り返し使って調整できるように、弱い方のモルヒネ。
夜寝る前だけ試してみる。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

10/2 諦めて部屋のトイレに。

昨日夜、トイレに行こうとして倒れて寝ていたのだから、
今日からはもう、部屋のポータブルトイレにすること！ときつく言う。
嫌ならおむつだからね！という、しぶしぶうん。と返事をする。

もう歩くのも、大変なんだね。

ベッドをばんばん叩くので、そばに言って何？と聞くと、かすれた声で、しょん・・・べん・・・という。

それはまだ、話せるんだ（笑

母が起きている時間は

僕が抱えている間に、母にパンツを下ろしてもらい、ポータブルに座らせて終了するが
母が起きていない時は片手で腰を抱え、片手で下着を下ろす。

抱き変えて、ゆっくりと座らせる。

その間、父はちゃんと立てている。それほど体重はかからない。

点滴をするのでどうしてもトイレが近くなるのだが、おむつは絶対嫌がるのでしょうがない。
僕もそのうち、腰をやっちゃいそうで危険だな。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

10/3 入浴サービス

14時からお風呂を予約したので、朝、看護師さんがつけた点滴を13時頃抜くことになった。

いつからか、僕はもう自宅に戻っていない。父を見てない時間がもったいないので、なかなか帰る気持ちになれないし夜は、なにかあったら僕が対応するしかない。

大人の男性を介護するのは、母ひとりでは無理だ。

ヘルパーさんが毎日朝と夕、来てくれるのは助かるようで、気を使う。他人が家にいるのって、慣れてないと疲れるんだなあ。

姉家族が来る。孫の問いかけに、父は、にっこり笑う。書いてきたおじいちゃんの似顔絵をベッド横に飾る。

今日はお風呂に入れるよ。と言うと、筆談で話す。「みんなでいっしょに フロはいりたかった」

フロ という字がなかなか読めず、解読するのに数十分かかった。（笑

姉一家、ヘルパーさん、入浴サービス、レンタル業者と次々に重なってしまい、慌ただしいという人が多い

ベッドマットをさらに快適な、褥瘡対策のエアマットに。

午後、お風呂を抱えて業者がやってきた。まずは医師が体調をチェック。

ベッドの隣に防水シートや浴槽をセットして、父を寝かせたままお湯に入れる。

お風呂、そのままかついでくるんだ。

ホース太い！

風呂場からつないだホースで、部屋のお風呂にお湯が満たされる。

浴槽内のハンモックのような場所に、父を寝かせる。

目を閉じてあたたまる父。

とても気持ちよさそう。

疲れたのか、うとうとと寝続けた。

お風呂に入っている間に、エアマットに交換。

最新式らしく、体の重心が勝手にエアで動くようになっている。すごい。こんなのあるんだね。

お風呂あがりなので除湿モードに。

気持ちよさそうに寝ている父。良かった、お風呂にはいれて。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

10/4 夜中、ポータブルトイレで

もう眠ってる時間のほうが多いのに、紙おむつの中には絶対に、したくないようで部屋の簡易トイレに座らせるという。

呼んで話しかけようとするたびに、何を言ってくれるかと期待するのだが出ない声を絞り出して「しょん・べん」と言う。

おとさん、あなた痩せたって一人で持ち上げるの大変なんだよ？
ベッドから、片手で父を抱え上げ、片手でズボンを下ろすという、神技をしなきゃいけない。
今日はもう自分で立てないから、抱える体重が全部僕の腕にのしかかる。

女のヘルパーさんなんかどうやってるのかな？

こんな病状なら、もらしてしまいそうだけど
父は絶対に、半端なおろし方で座ってしまっても、出したりしなかった。

ズボンをしっかり膝に下ろすまで我慢している。

少し扉を閉めて任せてから、「出た？」と耳元に聞きに行く。
いつもは10分くらいで出たっていうのにこの日は、20分経っても30分経っても、ううん。と首を横に振る。

ときどき、いきんだりしてその後とても痛そうにする。
あー！と悲鳴を上げたりもする。

出そうなの？と聞くとうなづくし
戻ろっか？と言うとううん、と首を振るしまた困ってしまった。

出そうなら、ベッドに戻してまたすぐトイレに来るのもかわいそうだし、
でももう、座っているのがつらそうで、手すりに体重をかけて斜めになってる。
見ていられなくて、看護師さんに電話した。

「どうしたらいいんでしょう」

夜中だというのに嫌な声ひとつ出さずに

「ん～～～～、出かかっているなら出したいだろうしね・・・うん、いっちゃおっかな！」と、またすぐに来てくれた。

24時間体制とはいえ、トイレごときで電話するのも気が引けたけど今の状態ではこれも命に関わりそうで、怖かった。

看護師さんが来た時には、既に1時間以上、座っていることになる。

看護師さんはさっと手を伸ばし、「ちょっとごめんね～、うーん・・・無いよ？」と父に言った。

「ある感じがしてると思うけど、中にはなにもないのよ。だから戻ろうね？」
父は素直にうなづいたので、ベッドにまた戻した。

「よくひとりでトイレに移せたねえ！」って言われたので

「え、でもヘルパーさんは女性でもやってるんですよね??」と言うと

「ないない、歩けない人は普通、持ってこれないよ～！」と言われた。そうだったの？

父はアンペックをまた入れて、眠りについたけど

その間の表情が、少しおかしくて

飛んじゃってる感じというか、瞳が泳いでしまっていて怖かった。

父が嫌がっても、早くベッドに戻すべきだったと、とても後悔した。

これでこれから父の意識がなくなったら、どうしよう。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

10/5 朝方、息が乱れる

昼間は、うとうと。眠りから覚めても、殆ど動かない。
夜中のトイレ事件があったので、なんだか意識レベルが落ちてしまったように感じる。
後悔、後悔、後悔・・・。

父の意志より、体のことを一番に考えるべき時もあるのだ。
判断の甘さが、命にかかわるのに、僕が父の寿命を短くしてしまったかもしれない。
父にごめんね、ごめんね、と謝りながら手を握った。

心配で、そばを離れられない。
父の部屋にPCを持ってきて、ずっと見える位置で、仕事をしていた。
数回、おむつを見るが、やはりしていない。

500mlの小さい点滴を、水分補給のために1日1パック。
起きている時には、小さい氷をなめさせる。

意思の疎通が、出来なくなってきたようだ。
心配で眠くもならない。

ほぼ父を離れずに1日を過ごす。

夜、10時頃。まだ早い時間だが隣に布団を敷いて寝っころがっていると
父の呼吸が少しおかしい感じがした。

起き上がって父を見ると、一瞬で思いっきり吸って、一瞬で吐く感じ
人工呼吸器のようだ。

そして、その感覚がとても不規則で途中10秒以上止まっていることもある。
急いで母を呼ぶ。

「ママ！！パパの息がおかしい！」

母は、え？？？という顔をして、急いで父のそばに駆け寄った。

母は、この時初めて父が死ぬことを実感したのかもしれない。
それまで、妻としておかしいんじゃないかと思うほど、
感情を切り離したようにおとなしかった母が
初めてリアルに気がついて、覚醒したのかもしれない。

母は父を揺すって、狂ったように叫びだした。

〇〇ちゃん、まだいやだよ！！いけないで！
私を置いて行かないで！！
いやだよ！まだだめだからね！！
もう少し頑張って——！！！！まだいや——！！

ほら、頑張って息吸って！！！！
まだだめだよ！！パパ！！！！

泣きじゃくる母と僕、夜だというのに大声で声をかけ続けた。
父は、止まっては、呼び戻され、止まっては呼び戻され、
それが2-3時間続いたのだろうか。

だんだん、父がもういい加減に疲れたんじゃないかと思い
呼ぶのをやめようとしたころ
父の呼吸は穏やかに、落ち着いた。

ただの偶然か、僕らの声が届いたのかわからない

静かで規則正しい呼吸に、戻っていた。

僕はもう、看取るまで寝れないと思った。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

10/6 腹水再び抜く

腹水がたまると、胃や肺が押し上げられて苦しいので息をラクにするために、腹水をまた抜いた。

父はもう、意識がないのが普通で、起きていてもうつらうつらしているはっきり目覚めているときは目でわかる。

目覚めていそうなときは、一生懸命、返事のいらぬ話で話しかけた。

腹水は今度は1.8Lもぬけた。

腰の床擦れが赤くなっていたそうなので看護師さんがこれ以上悪くならないよう、フィルムを貼ってくれた。

剥がすときが、痛そう・・・と思ったけどもう剥がすことを想定してないってことなのかな。少し、胸が痛んだ。

口で呼吸をしているので、口が乾くだろうと喉がつまりやすい程度の小さい氷を口元に持っていく。唇に当てて「氷だよ」というと、父は、そうそう、それが欲しかった！とでも言うように口を開ける。

のどが渴いてしまったら、くっついて息ができなくなりそうで飲み込まずに口内に染みこむ程度の、小さな小さな氷を、一定間隔で上げ続けた。

唇が乾きそうなので、リップクリームを買ってきた。また今度動かすときに関節が固まって動きにくくならないようにと手や足をマッサージした。

これ以上床ずれができないように、手を入れて背中や腰もマッサージした。

もう何もしてあげられない父に、僕の役割を一生懸命探していた。

まだ寝たきりになって間もないのに
がりがりになったせいか、腰骨や尾てい骨のあたりが赤くなっている。

ベッドマットが空気で荷重を自動で動かしてくれるのでセットしているのだけど
肩などがだいぶ傾くので、無意識に支えるのか、大変そうに見える。

すごいね、最新式だってさ！パパ！

父は顔が壁の方ばかりを向くようになった。
問いかけにもあまり反応しない。
起きているのか、寝ているのかわかっているのかわからないのか、合図がほしい。

起き上がれないし、意思の疎通も出来ないので
おむつに小を出すようになった。
あんなにおむつに出すのを拒否していたのに、もう拒否もできないんだね。

出るとうーうー騒ぐから、出たのは分かった。
やっぱり、おむつが嫌なのか（笑

時々お腹の横に手を当てて、肌をつねっている。
姉の話では、父は痛い時にそこをつねると痛みが和らぐと言って
点滴や腹水を抜く注射の時にも一生懸命、つねっていたそうだ。
つねるところが赤くなってる。

痛いのかな。
痛いなら、痛いと言ってほしい。

でも痛い？と聞くと、ううん。と首をふる。
わかって返事しているのかも、あやしい。
でも、うん。とううん。がある以上、わかっているんだよね。

パンツ型のおむつが切れそうなので、次はどうしようかとネットショップを見て悩んでいた。

もう立てないから、パンツ形、いらないのかな。

おむつの説明ひとつで、グラっとくじけそうになる。

「自分で立てる方、トイレに行ける方用」などと、わざわざ書いてあるからだ。

もう一度だけ覚醒して、ちょっと話してくれないかな。

こんなに早く、話せなくなるなんて思ってなかったよ。

大体1日に3回、座薬を入れるようになっていたけど増やしたほうがいいのか。

苦しんでる様子がないので分からない。

あまり使いすぎると、僕らがわからなくなるそうだし

やはり、子供に座薬を入れられるのは屈辱だろうな。

看護師さんは、

「眠り続けることもないし、痛がらないのは、薬がちゃんとコントロール出来てるからですよ」

と言っていたけど

本当に痛くないんだろうか。気持ち悪くないんだろうか。

もう筆談も出来ない。

何を考えているの？

何して欲しい？何したい？

僕がそばにいるの、わかる？

何か、伝えてください。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

父は、ずーっと壁を見ている。
目は開いているのに、見えていないのかもしれない。

昨日は夜中に電気をつけると眩しそうにパチクリしていたのが
電気をつけても何も変わらない。目が濁っている感じがする。

夢を見ているのかな。父も、僕も。

看護師さんが体を拭いたあと、少し起きたようだ。
なにか言いたそうだったとのこと。そばにいればよかった。

前回腹水を抜いてからは、腹水はたまっている様子はない。
お腹、らくになったかな？
水分をろくに取っていないのもあるかもしれないね。
点滴をまたつける。夕方に終わったので、点滴を外す。

手足が少し、冷たくて足先が紫色になっている。
でも汗をかいているように、肌がしっとり濡れている感じ

寝たきりになると関節が固まって、動かなくなると聞いたので
膝や足首を動かして、マッサージする。
足がすごく冷たそうだ。

先週、医者が来た時に、今後の様子を詳しく教えてくれていた。
背中や、手足の先に紫斑が出てくると、血液の環境がうまく行かなくなってきたということ。
看取りの日も近いです、と。

僕はまだ全然大丈夫だよ。
このままずっとでもいい。逝かないでほしい。

今日は、おむつに初めて、大もしていた。
あれ、こんなに腸に残ってたんだ？食べてなかったのにね。
最初はヘルパーさんが交換してくれたんだけど
帰ったあとも2回もしていて、すごい量だった。

緩いので、処理が大変。

看護師さんに聞くと、点滴だけでも貯まるんですよー。と言っていた。

こないだトイレに座った時に早く出てくれればいいのに・・・
と、この時は思ったんだけど。
便秘で苦しんでたから、大がいっぱい出て、ちょっと嬉しかったんだけど。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

父が動かなくなると、点滴の交換とおむつ交換くらいしかすることがなくなった。
体は看護師さんやヘルパーさんが拭いてくれるし、
食べないし飲まないし。

氷を口に持って行っても、欲しがらない。
耳が聞こえてないかもしれないので、なるべく触って、撫でながら話しかける。

夜少しネットで遊んでいたけど、
途中で眠くなって、ゲームは落ちた。

そして父の横に布団を敷いて横になりながら
色々考え事をしていた。

少し寝よう、そう思った頃
父の息がまた、人工呼吸器のように短くなっていた。

吐いて、吸える隙に一気に吸う感じ。
水泳の時の息継ぎのような感じ。

やばい！と思って母を起こした。
姉を呼ばなきゃ！と思って携帯を持つが、
慌てていて、どこを押したら姉の電話番号が出てくるか
手間取った。でも、かけても電話に出ない。

あーもう！と思いながら父のそばに戻ると
最後の息をしたところだった。

吸っても空気が入らない感じのクツという息を3回した後、動かなくなった。
あっ！と思った。
人が死ぬところを見たことがなかったけど
これが最後だ、と瞬間的に思った。

母がただただ、泣いていたので、

「まだ聞こえるから！聞こえるから、ママが声かけてあげて！」と怒鳴った。

僕は一生懸命、心臓を叩いた。胸を押した。動け！動け！

まだだめだよ、パパ、もう一回息して！！こないだは戻れたでしょ？？

でも二度と、父の胸も口も動かなかった。

本当の終わりが来てしまった。

姉に何回も電話したけど、起きなかった。

その後、看護師さんに電話すると、

慰めてくれたあと、お棺に入れるときに着せたい服を出しておいて。と言った。

少し前に、白装束にするか、好きな服を着せるかと聞かれて

母が白装束よりスーツがいいよ、といったのでお気に入りのスーツを準備してあった。

今5時半くらいだけど、7時頃くるらしい。

やっぱり

緩和ケアでは、医者が駆けつけて人工呼吸をとか、酸素マスクをとか

特に希望がない限りは、ないんだ。聞いてはいたけど迷いは出た。

でも、あっても、苦しいのが伸びるだけだから

これでよかったのかな。これが自然死って、やつだもの。

また看護師さんから電話があって

お風呂にみんなが入りたいって言ってたから

最後にみんなでお風呂に入れてあげましょう。ということになった。

だいぶ前に、みんなでお風呂に入りたかったと筆談でかいたのをこの人は覚えていてくれたんだね。

その後、姉とも連絡が取れ、家に来た。

7時半頃、看護師さんが到着して、お父さんを見たあと僕に「頑張ったね」と、背中をとんとんしてくれた。僕は、大泣きしてしまった。

「あなたがいなかったら、お父さんは絶対自宅で看取れなかったよ。あなたがいたから、お父さんの希望通り最後までおうちで出来たんだよ。よく頑張ったよ。立派だった。」

と言ってくれた。

看護師さんこそ、他人なのにすごく優しく、気を使って、いつでも全力で頑張ってくれた。

姉に、「子供みたいに泣くんじゃない」と言われたけどおもいきり泣いた。過呼吸になりそうなくらい、泣いた。

看護師さんに言われたとおり、お風呂を用意し、服を脱がすと、また大をしていた。

「昨日も何度もしてたんです。」というそれは、筋肉に力が入らなくなって、降りてきたもので死ぬ前にはそうなるらしかった。つまり、前兆だったんだ。

綺麗にしたあと、腸に綿を詰めた。

裸にした父を、看護師さんが女性2人でお風呂に運ぶ。
借りていたけど一回も使わなかった介護用の風呂いすに座らせ
シャワーを掛けて洗い始める。

うなだれる父の横顔、眠っているみたいだ。
やっぱりかっこいいね。パパの顔、好きだ。

息をしないから、頭からシャワーを掛けてもむせることはないのか。

洗ってあげて。というけど、父の体を洗うなんて生まれて初めて。
そして最後。

傷つけたら肌が再生しないとすると、怖くて怖くて
いつもどおりでいいんだよ。と言われるが力を入れられない。
こんなに痩せて・・・。

姉と母も洗った。そしてまた看護師さん2人で湯船に入れてくれる。

看護師さんはもうずぶぬれ。
濡れちゃうから僕が・・・と言ったのだが、「着替えもあるから大丈夫」とのこと。

パパ、気持ちいいかな？看護師さんに入れられて、恥ずかしいかな。
さっぱりしたあと、ベッドへ戻ってスーツに着替える。

もうおむつもいらないよ。

髪を櫛で整える。かっこいいよ、パパ。
看護師さんがヒゲを剃り、元気なときのようにほっぺをふくらませてくれ、
大好きな帽子とサングラスも一緒にベッドの横へ。

8時半頃、医者が来る。死を確認するために。

死亡診断書を受け取る。

医者も、言ってくれた。

僕は緩和ケアを専門に、いろいろなご家庭を見てきました。

でも、自宅で看取ると言って帰ってきて、最後まで見られるご家庭はほんとうに少ない。

おむつになったらホスピスに行くのが通常だって、前に言ってあったでしょう？

大体は、見きれなくなって、ホスピスで最後を迎える方が多いんです。

ホスピスですと、延命治療をしない場合、死の瞬間に立ち会えないことも多いです。

僕は本当は、君がお父さんを最後まで見るのは無理じゃないか、と思っていた。

でも最後まで、ほんとうによく頑張ったね。誇りにしていいよ。と。

JUGEMテーマ：[緩和ケア](#)

しなければいけないことは、途絶えないでやってくる。

医者も看護師も帰ったあと、まず、姉と相談して決めていた葬儀社に電話をした。
すぐに家にやってくるそうだ。

父の顔を何度も撫でる。
まだ、寝ているようにしか思えない。
母が心配なのでずっとそばについておく。

遺影をどうしようか、という話になり写真を探す。
最近の写真は、デジカメの中なのですぐ出せない。

少し前の写真だけれど、少し笑って気取って中央にいる写真があった。
薄いサングラスなので、顔も見えるしスーツも着ている。

これは？と出すと、母も気に入ったようだ。

正直、身内としてのお葬式はこれが初めてだから
次に何をしたらよいかわからない。

1時間ほどで葬儀社の人 came。

支度をしますので・・・と言って、父の部屋のドアを閉めるが
なにをするのかわからなかった。

終わると、父の体はドライアイスにくるまれていた。

最初に思ったのは「手が握れない」こと。
そして、抱きしめられないこと。

最後に、冷たくて、もし生き返ったら寒いじゃんってこと。

知っていたら、抱きしめて手を握っておいたのに、もうできないじゃん。

姉が連絡したらしく、3人、近くの親戚の人が来てくれた。

そして、お線香を立てて

近い方から、お線香をあげて、綿棒で死に水をとってください、という。

そうかそういう儀式があるのか。

想像つかないことが、次々に行われる。

母がお線香を上げ、姉が上げ、次が僕。となったとき

僕はとても悲しくなり

「どうしてもパパにお線香上げなきゃいけない？」と言って

また泣いてしまった。

お線香をあげるのは、死んだ人。

あげてしまったら

ほんとうに死んだことを認めることになりそうで

父に向かってお線香を上げるのはまだ早いでしょ、と思ってしまった。

さっきまで生きてたんです。

親戚のおじさんが「ちゃんとお父さんにあげてあげなさい。」というので

しかたなく、したけど

まだお線香は早いよ？

まだ僕はパパを、死人にしたくなかった。

すべてが他人ごとにも思えた。

それにしても、死んだ日は線香を絶やさないってのは
どういう意味があるんだろう。

消えないようのうずまきになっているほうが煙くてしかたがないので、
母に言って、消すことにした。

パパごめんね、これ煙いから消すよ！って言って。

JUGEMテーマ：[家族の死](#)

10/10 式の日取り決め

うちは、無宗教だ。

今までお線香や仏壇とは縁がない。

お墓参りや親戚の行事の時には、ちゃんとやるけれども

お墓に入っている人は知らない人だから

死人に対する実感は今まで無かった。

台風が近づいているからすぐしたいけれど、11日は友引だからダメとのこと。

式の日取りを決めるのに少し悩んだ。

結局、12日にお通夜、13日に告別式ということで落ち着いた。

天気予報では本格的に台風が関東に来るのは14日ということで

早まらないことを祈った。

そうだ・・喪服。喪服持ってない。

父の喪服を出してもらって着てみると

肩が狭い。そして裾が・・。慌てて裾だけ少し伸ばしてくれた。

身長はそれほど変わらなくても、体型はやっぱり違うんだな。

父は多分、175cmくらい、僕は177cmくらい。

僕は家にあるものは、この喪服だけもらうことにします。

結局、父が退院してからほとんど自宅に帰らなかったなあ

パパ、世話がかかるんだもの。

そして父の親しかった人を調べる作業が始まった。

誰に連絡すればいいのか。

仕事先、趣味の仲間、級友？

名簿らしきものや携帯の電話帳、手帳を調べ、書き出す。

親戚はどこまで伝えればいいのか。

仕事先はわかるけれど、他はあまりわからないので、
とりあえず電話をかけ、父を分かる人皆に伝えて
来なかったら来なかったでいいじゃない、ということになった。

人数の把握が全くできなかった。
葬儀の場所はある程度大きいので、増えても受け入れは可能だそうだ。

父の書類やかばん、引き出しをあさる一日になった。

暇があれば顔のハンカチをとって、布団をめくって、父のベッドにもたれかかっていた。
急に息を吹き返さないかな。
でもそしたらこれ、寒すぎだな。

父の意識は今、どこにあるのかな。
まだ部屋にいるんでしょ？

今の僕らを見て、どう思っているのかな。

とりとめもないことを、ぼーっと考え続けた。

JUGEMテーマ：[家族の死](#)

死んだ日から毎日、午前中に
葬儀社の人やがやってきて、ドライアイスを交換してくれるそうだ。

唯一出ている顔も、相当冷たい。
布団をどけてみようと思ったら、今日は布団まで凍ってくっついている。

これでも生き返られるかな？と、まだ考えていた。
父の友人探しはまだまだ続く。昨日だけでは連絡の取れない人が多かったからだ。

普通はどうするのかな・・・と思っでは、普通って何？と、問い返す。

僕も母も、父の顔をなでては泣く、の繰り返し。
唇がダメージが来そうなので、毎日しめらせてはリップクリームを塗る。
肌も乾燥したらかわいそうなので、ローションを塗る。

明日、家からいなくなってしまうと思うと。

父が一人で一生懸命働いて、買ったマンション。
なのに、明日家を出たらもう戻れないなんて。
自分の家なのに、戻れないなんて。

このマンションに引っ越してきた時は僕は小学生だった。
引っ越す前に、母の好みで家をすべてリフォームをしたのだけど、
自分の部屋の壁紙を選ばせてくれたので、僕は見本を見て、青と緑の、ストライプを選んだ。

だけど部屋にはられてみてからびっくりした。ものすごい派手なのだ。
僕は引越し当日に後悔する羽目になった。
子供に選ばせちゃダメだよなw

引っ越しと言ってもすごく近かったので
僕は父の会社の人やが運転するトラックの荷台に乗って移動した。
警察に見つかったらものすごく怒られたんだろうな・・・

それから、僕が社会人になって家を出たら すぐにお母さんがまた、
部屋をリフォームしてしまったので
今は、これまた派手なピンクのローズの壁紙になっている。

僕は花がらの部屋には住めないで（しかも倉庫にしまっているし）
実家に戻ってくるときには、父の部屋をもらうことにした。

僕、実家戻るよ。

母に言うと、嬉しそうだった。

父に家事もお金の管理も、ほとんど頼りきっていた母が
これからひとりで住むには、不安がいっぱいだろう。

姉には子供も夫も、家もあって、姉が実家に住むことは考えられない。

僕しか居ないじゃないか。

くやしいけど、嫌じゃないけど、残念だけど、しょうがない。
ものすごく複雑な気持ちだ。

ただの、消去法だ。

当然なんだ。

母が、一番悲しいんだ。

JUGEMテーマ：[家族の死](#)

お通夜の日、まずは家から父を運ぶ儀式。

父が、この家からいなくなってしまう。

僕にはそれが一番、父にとって嫌なことじゃないかと思った。

家にいるのが最後、そう思うだけで涙腺が緩んだ。

葬儀社の人に来て、お線香のセットを片付けてストレッチャーに乗せる。

ひとり、鍵を閉めるために残り、それ以外のご家族は下で待ってて下さいというので部屋に残る役を引き受けた。

最後まで僕が父といっしょにこの家に居たい、と思った。

エレベーターを出て、車に乗せるのを皆で見送る。

パパ、ここがあなたの頑張って買ったマンションだよ。

僕らのために、頑張って働いたんだね。

皆に残してくれて、ありがとう。

僕がちゃんと引き継ぐから、大丈夫。

ママのことも最後まで見るから、大丈夫だよ。

しきたりでは、ここでホーンを長く鳴らしていくのだけどマンションなのでやめておきましょうか、と。

母が、迷惑だと思うので、そうして下さい。と返事した。

車を見送ったあと、着替えて葬儀場へタクシーで向かう。

まず最初に納棺式をするそうだ。

少し準備をしたあと、納棺式が始まる。

葬儀社の司会のもと、棺に花を入れ、蓋をする作業だ。

一緒に焼いてもらいたいものをこの時に入れる。

好きだった帽子と、趣味の本と、ママの失敗作の黒焦げパン。

この黒焦げパンは、何年も前、父が嬉しそうにママの失敗作だよ！といつも見せびらかしていたのだが

なんとしっかりとまだ、父の棚に洋酒とともに、飾ってあったのだ。

大事にしてたんだな・・・母のこと大好きだったんだな。

手が凍って霜がついていたので、握って霜を溶かす。

こんなに固く凍ってしまうほど冷やさないで、だめだったんだらうか。

では、蓋を閉めます、と言われる。

手の霜は、もう少しとってあげたかった。

蓋を閉めたあと、顔だけ見える窓があるのは知っていた。

葬儀社の人、蓋を閉めたあと、そこを開けてくれたので

だから、手を伸ばした。すると、透明のセロファンのようなものにあたり、手が遮られた。

「なんかあって、触れない・・・」とつぶやくと同時に、また涙が出てしまった。

窓が開けば、まだ父に触れると思っていたのだ。

葬儀社の人、慌てて、

「蓋はまだあきますから、触りたいときは蓋を開けていいですよ」と教えてくれたが涙というものは、堰を切ってしまうとすぐには止まらない。

そのあと、配置を変えて祭壇前に棺は置かれた。

お通夜になる前に、また、父を触ろうと思って祭壇に行くと

母が自分で蓋を開けて触っていた。

「冷たいねえ・・・」とつぶやいていた。

僕も横から手を出して触って

「冷たいね」といった。

お坊さんにご挨拶に行く。

戒名を、つけてくれた。カッコいい名前だった。

人の流れの中心にたち、公明正大に、正しい方に人を導く。

そして暖かい陽の光で、皆を明るく照らしてくれる。

そういう意味だそう。

死んだあとに少し話ただけなのに、父のことをわかってくれた気がした。

少し、仏教の考え方を教えてくれた。

人が死ぬのは、別れではない。消えるわけではない。

仏教の道に修業に入るんだと。その修業に入った時の名前が戒名である、と。

お坊さんは、迷わずに修行を始めるための導きをする人なのだと。

細かいことは分からないが、この人も、自分の信じる道に向かって

辛い修行や勉強を積み重ねてきた努力の人。どんな理由でなったであれ、

お坊さんと呼ばれるまでには、僕には出来ない色々なことをしてきたんだ。

人は、別れの悲しみを少しでもやわらげるために、いろいろ考えぬいて

こういう宗教を作り上げたんだらうなあ、と思った。

生きている人がつらい気持ちを耐えていくための、けじめなんだろうな。

次々と、弔問客がやってきた。

想像より多い数の方が来てくれた。

僕は泣き続けてタオルで顔を隠していたので、よく見れなかった。

一応、僕の友達で父を知っている人には言ってあったが
その友達も誘い合わせて来てくれたようだ。
うちは車屋なので、車検や、修理、車を買ったりなどでよく会社にも友だちが来て
父と仲良くしていた。
だから、僕の友達だけでも7-8人、来てくれていた。

お通夜の読経が終わり、まだ残っている客に挨拶に行くと
帰ろうとしていた友達が輪になって出迎えてくれた。大丈夫？と。

泣き止んだ僕がまた泣いてしまった。

僕がこんなに泣いたところを
友達が見たのは、初めてかもしれない。

でも親が死んだ時に泣かないでいつ泣くんだろう
悲しいからおもいきり泣くよ。今日は我慢なんて、しない。

弔問客が帰った後、親戚・家族で身内用の寿司を囲む。
良かった、こういうところの食事はちょっと不安だったけど
美味しいお寿司を弔問客にも、振る舞えたようだ。

この日の夜は、寝ないで見守るとのこと・・・だけど
親戚が帰ってもまだ、23時位だった。
母が疲れているようなので、先に布団を敷いて寝かせた。

静かすぎてすることがないので、タブレットでTVをつける。
台風の接近のニュースを、やっていた。

思い出しては、父のところに行き、蓋を開けて座って、父の顔を眺めていた。

夜が明けたら、この体が、なくなってしまうのか。
不思議というか、信じられない。

一昨日までは、ヒトだった。
死ななければ、焼かれるなんてことありえない。

父の存在が、消えてしまうなんて

窓から、街を見下ろせる。ビルの窓に光が灯っている。
父が消えても、世界は何ひとつ、変わらない。

僕にとっては、生活が一変する出来事なのに。
でも、全世界の家族が、この経験をしているか、するはず。

知らなかった。こんな世界。

みんな耐えているなんて、すごいな。

JUGEMテーマ：[家族の死](#)

夜になり、広い和室に布団が用意された。
通夜の料理振る舞いをした部屋にそのまま泊まる形だ。

ずっと寝ていなかった僕は、何度か父を見に行った後、眠くなってしまい
15分だけ・・・と、2時頃、アラームを付けて寝たのだが
気がついたら3時間も寝ていた。

姉は、起きていた。

目が覚めて、また父のところに行く。
蓋を開けて、頬を撫でる。

今日焼かれちゃうよー。
冷たいところから熱いところってびっくりしないでね。
そんなくだらないことをずっと話しかけていた。

唇が乾いてきて可哀想。
水を手につけてきて唇を濡らす。

今にも、氷を欲しがった時のように口を動かしそうだった。

寝たきりでも何でも良かった。
まだ生きていて欲しかった。

今日は、焼かれる日。

告別式が始まる。
フタに釘を打つ、という儀式。

僕が自分で、打ち合わせの時に儀式をするか聞かれて、します。と返事したのだが
深く考えなかった。これは結構つらいものがある。

閉じ込める意味がわからない。

フタを打ち付けるということは、もう触れないということだ。
僕は最後にもう一回触らせてくださいと、ぎりぎりのところで蓋を開けてもらった。

それでもまだ、物足りなかった。
また泣いた。

葬儀場から出る。写真を持つ役をやらせてもらった。
バスで斎場に向かう。

斎場につくと、バスを降りてそのまま10m。炉の前に並ばされた。
建物に入って、目の前が、炉だった。
まさかこんな、ついてすぐに炉に入れると思わなかったので
心の準備ができていなかった。

お坊さんが軽く何かを唱え、係の人が棺を押そうとした時
また僕はわがままを言ってしまった。

「もう、顔見られないんですか？もう一回だけ、見ちゃダメですか？」

葬儀社の人、係の人に
「一回だけ開けてさしあげてよろしいでしょうか」と聞いてくれ、
焼く係の人は、「わかりました。どうぞ」と、快く返事してくれた。

わがままだって、わかっていました。
ごめんなさい。
でも、言わないと後悔しそうだったんです。

そして、泣かずに、セロファン越しの父に

「パパ、今までありがとう。ばいばい。」と、小さく手を振った。

待合室に入り、1時間ほど待つ。

あの体が1時間で骨になるということは相当強い火力なんだな。

そして、呼ばれる。

僕はこの時、やっと、父が死んだことを
つまり、もう絶対に戻らないことを、理解できたんだろう

骨になってしまったら、もう、絶対に、生き返れない。

骨になってしまった父を見たら、悲しさがすうっと消えていた。
諦めがついたんだと思う。

父の骨は、ものすごく残っていた。
骨壺にはいらぬのでは、と思ったくらいだ。
係の人が、一言断っては、大きい骨を砕いていた。

蓋を閉める時、焼けなかったお気に入りのサングラスを、骨の上のにのせた。

父は結構な健康オタクで
健康食品やビタミン剤、カルシウム剤などいっぱい飲んでた。
運動も好きで、市のマラソン大会なども出てた。

ユンケルだってしょっちゅう買ってきて
僕の家へ届けに来た。
僕は薬系や臭いものを飲むのがとても苦手で
粉だとオブラートをまだ使っているのを知っているくせに
ユンケルを飲めと、持って来てた。
まだ、家にある。

弱いワケがない。

病気に負けるわけがなかったはずなのに。

がんって怖いね。

帰りは僕が骨壺を持ち、葬儀場まで帰る。

その後は親戚だけで、精進落としの懐石料理を食べる。

こういう料理は久しぶりで、美味しかった。

パパ。

最後に美味しいもの食べたのはいつ？

入院していても、家にある、うにのびん詰だけは食べるなよ！パパのだから！って
言ってたけど、見たらもう賞味期限切れてたよ。ついでに言えば、うに、僕食べられないよ。

ユンケル何本も飲むくらいだったら

なんで早く病院に行かなかったの？

それに、なんで遺言とか残ってないの？

死ぬのわかってたでしょ。

会社どうすんの。ママ残してどうすんの。僕どうすればいいの。

JUGEMテーマ：[家族の死](#)

10/16 お風呂とトイレの工事

工事業者の人が来た。

介護保険を使って、つけるはずだった手すり。

父がなくなった今、介護保険はもう使えないのだけど

最初の工事予定日は13日だったので、急遽ずらしてもらった。

万が一、間に合わない場合は実費になりますがいいですか？と言われて

いいです、と言ってあった。

頼んだときはまだ、歩けたからね。

でもどうせ、お風呂のドアは立て付けも悪かったから交換したかった。

キャンセルも申し訳ないので、そのままつけてもらうことにした。

今、腰がいたい母は、トイレの手すりが嬉しいようだ。

母と話して、父の部屋と母の部屋のリフォームをしてもらうことにしてあったので
ついでに見積もりをしてもらうことにした。

他の業者にも見積もりを頼んである。

どのくらいかかるのかな。

JUGEMテーマ：[家族の死](#)

10/17 手続きいろいろ

お葬式だけでもめいっぱいだったが、
これから本格的に名義変更や、引き落とし口座変更
銀行の解約、などやることがたくさんある。

一家の大黒柱が死ぬということは、総取っ替えということだ。

ひとまず、区役所で年金と保険の手続き。と思ったら
年金は年金事務所に行かなきゃいけないらしい
個人情報保護法で、父の住民票さえ、取れない。

僕と父の現在の住所が別な事もあるし、
第一相続人が母なので
母じゃないと手続きできないものも多い。

委任状を何枚か作っておかないといけない
書類が足りなくて、出直しもいくつか。

銀行口座は、知らせる前に残高を引き出す必要があるらしい。
知らせると口座凍結され、引き出しも引き落としも何もできなくなるらしい。

生命保険などに入っていたのか
父は自分で全部管理していたので全然わからない。

どうなんだろう？と姉と話題には出したが、生きてる父や
余命を隠していた母に聞ける事ではなかった。

見つけた書類に端から電話をして、今有効かどうか、
手続きに何が必要か聞き出す。
出資金ってなんだよ？カードどれ使ってたの？

とりあえず、公共料金は全て僕の口座から落ちるように
電話をしまくって、届け出用書類の郵送を申請。

めんどくさい。仕事ができない。

JUGEMテーマ：[家族の死](#)

11/12 父の夢を見た

いろいろな手続で忙しい日々だった。

49日までの応急の祭壇に、父の大きな遺影は飾ってある。
その祭壇の真ん前に布団を敷いて、毎日寝ていた。

お線香の匂いにもなれた。
好きな花を時々、買ってきて飾った。

あとから知った人やお葬式に來れなかった人が、時々お線香を上げに來た。
リフォームの日にちも、僕の部屋の引っ越しも決まった。

なんだか、ボロ負けしたバスケの試合終了の後みたいな時間だ。
疲れきって、くやしくて、後悔して、あきらめきれなくて。
でも結果はもう出ている。トーナメントは負けたら終わり。

祭壇だけが、花が増えお供え物が増え、色々な香りのお線香が増え、賑やかになっている。

この日、父の夢を見た。
父が夢に出てきてくれたのは、初めてだった

家で、ベッドの背を起こし、起き上がってる父は
皆の行いが記録されてるファイルのようなものを開いて読んでいた。
「ダンディって何？」と聞かれ、
「かっこいいとかしぶいってことだよー」と答えると嬉しそうに「そうかぁ！」と笑った。

退院するとき、おしゃれをして病室から出てきた父に
看護師さんが一斉にこちらに来て、〇〇さん、ダンディー！とか言ってくれたから。
その記録を見ているのだと思った。

そして、

「俺、死なないからずっとここにいるから」というので
僕は嬉しくなって「うん！」と言って抱きついて
わーい！と（言ったかどうかは分からないが）そのまま父のベッドに潜り込んだ。

昨夜、寝てる時に、「りん」が落ちて転がって来た
寝ぼけながら戻した記憶がある。

夢の前か後か、わからないけど。

今までりんが落ちたこと無いので
父がしたのか、落ちたから父の夢を見たのか わからない

会えて、とても嬉しい気持ちと
現実を思い出して悲しい気持ちと

父がいくら天国からみんなの行いのファイルを見ても
見られて恥ずかしいことを僕はしないよ。

今までもしてきていないつもりだし
これからもしない

父はとても真っ直ぐな人だった
優しく、不器用で、人を信じ、人のために泣き、嘘はつかず、人を恨まず、
犠牲になっても、また笑顔で前を向いて立ち上がる人だった。

無理じゃない範囲で、介護が出来たし、
最後の一瞬まで看取ることが出来たし、
僕は、後悔しないだけの親孝行をさせてもらいました。

僕は、父の子供に生まれてよかった。
そう思わせてくれて、ありがとうございました。

父の話はここで終わりにします

最後に

8/29の日記で父が言っていた、19という数字に気をつけなきゃ、という話。
父のなくなった日が 10月9日 じゅう+く だったのは、偶然でしょうか？

JUGEMテーマ：[家族の死](#)

あとがき

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

心の整理と、記憶し続けるために綴ったブログで
自分でも、何回も何回も読み返して、当時の父の顔や家の様子、気持ちを思い出しては
まだ、泣いています。

こうして読み返してみると、
僕は恵まれていたと思います。

実家に近かったこと。自由に動ける仕事だったこと。
父が大好きだったこと。
良い医療・介護関係者に巡り会えたこと。

だからこそ、苦に思わずに、最後まで出来たのだと思います。

父と、こんなに早くお別れすると思っていたけど、
もちろん、書けなかった、いろいろな問題はあったけれど、

少しおとなになれたかな。

実は、この年でパパ・ママと呼んでいるのは、少し恥ずかしかったので
最初はお父さんと書いていました。

でも 僕にはやっぱり 「パパ」 なので、ちゃんと書き直しました（笑

どうもありがとうございました。

ぼくが、父を看取った話。 末期がんの在宅介護・緩和ケア

<http://p.booklog.jp/book/93567>

著者：桜咲夜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sky00000/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93567>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93567>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ